吉見百穴をめぐる人々
特別展「吉見の百穴と東日本の横穴墓」によせて

昼　間　孝　次

埼玉県のほぼまん中、東西に横たわる比企丘陵は凝灰岩が発達し、お椀を伏せたような地形が連なっている。今から1300から1400年前、古代人たちは凝灰岩をくり抜いて墓をつくった。掘るに堅すぎず、手ごろな耐久力もあったからだ。比企丘陵はこうした横穴をつくるには最適の地だった。八丁湖や市の川に面した吉見町の丘陵地にも古代版「霊園団地」を見ることができる。「黒岩横穴墓群」と「吉見百穴（よしみひゃくあな）」だ。

この特集は百穴に挑んだ男たちと、近代考古学を切り開いた男たちの物語である。

その１　根岸　武香（たけか）　天保10．5．15―明治35．12．3（1839―1902）

追　悼　明治35年（1902）12月10日、大勢の会葬者が見守る中、東京帝大（現東京大学）勤務の柴田常恵は、弔辞を代読していた。「根岸武香君曩（さき）に東京帝国大学理科大学に於て松山近傍の横穴を調査せし際諸種の便宜を謀り後同学より埼玉県下人類学上の調査嘱託を受け益々斯学の爲めに尽す所あり今や溘焉（こうえん）長逝せらる誠に痛憤の至りに堪へざるなり―略―」[1] と読み上げた弔辞は、日本人類学の基礎を築いた同大学教授坪井正五郎が寄せたものだ。坪井は「氏の死去は学会の大損害で有りまして、私は私交上のみならず。学会の爲にも深く悲んで」[1] と哀悼した。

根岸武香
（『東京人類学会雑誌』207号から）

名主を務める素封家　古墳が点在する大里郡甲山（かぶとやま）村（旧大里町、現熊谷市）。この葬儀―神葬祭は、国道407号と県道307号・福田―吹上線が交差する南東角地に長屋門を構える広壮な屋敷内で執行された。武香の生家である。

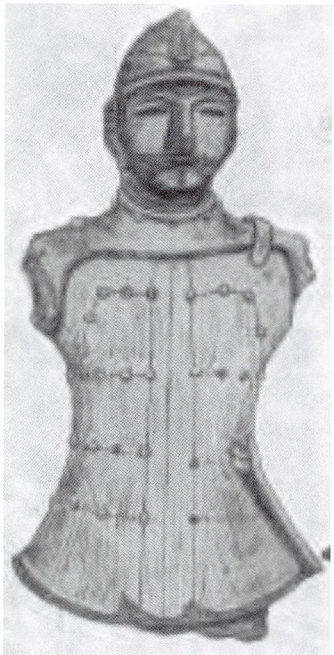
武香の活躍は政治、農業、土木、教育、学術など多方面に及んだ。その足跡に比例して、土地の名士はいうに及ばず、外国人から大学教授まで、交際範囲も広い。代々名主を務め、父友山以来、幅広い人脈が培われ、武香の名声に訪ねる人は後を絶たなかった。

因みに、30年「貴族院議員選挙有資格者」[2] によると、武香の税額は1,299円16銭６厘、県内ではベスト15の７位にあげらた豪農である。

パリ万国博への出品　31年９月、武香のもとに一通の封書が届いた。〈親展〉とあり、消印は〈東京下谷〉、差出人は〈帝国博物館總長男爵　九鬼隆一〉とあった[3]。

開封すると、上中条村（現熊谷市）出土の武人埴輪―後、帝室博物館（現東京国立博物館、重要文化財）蔵―と大谷村（現東松山市）出土の男子埴輪を明治33年に開かれるパリ万国博に出品する『日本美術史』へ掲載するための依頼文だった。当人は「名誉ノ至ニ付」と快諾、同書は後年日本国内でも出版された。

収集家の貢献　このように、武香は中央でも知られる収集家だった。「余性好古ノ癖アリ」[1] というように出土遺物から、古美術、古文書、書籍、古銭、印鑑など多岐にわたった。村人が持ち込ん



パリ万博に出品された武人埴輪
（『東京人類学会雑誌』207号から）

だ遺物を買い入れたり、時には知人に贈ったりもしている。

とにかく武香は忙しかった。公務や家政の合間をぬっては、頻繁に上京する。武香の足は、東京深川へ向かう。江戸幕府編さんの『新編武蔵風土記稿』発行について、印刷兼発行所の近藤圭造と打合せるためだ。内務省地理局に代わって出版発行請負人となり、明治17年６月出版にこぎ着ける。

全80冊、定価20円。現在の価格に換算すると4,000倍以上になろうかという高額さだ。投入した資金をどれくらい回収できたかは、わからないが、トップセールスを展開。比企郡番匠村（現ときがわ町）の医師・歴史学者として名高い小室元長（1822―1885）らが買い求めている。武香の財産は、いまも必携の書として出版が続けられている。

また昭和６年（1931）故人の遺志により、古写経、古文書、地誌類など約950点が上野の帝国図書館（現国会図書館）へ寄贈。「胄山文庫」の名を冠され、開放されている。

古代への憧憬　よき薫陶を受けた教養人は、地方行政を担うかたわら、間近に眼にしてきた古墳の記憶が、古代への憧憬となったのだろうか、考古学の世界へ誘われていった。周辺に点在する遺跡は、格好の遺物採取の場であり、なれ親しんだ自分の庭でもあった。例えば、明治９年の日誌には[4]、

一月二日―略―内山温載（久米田村戸長）ヲ訪フ斎瓶一口瓶岡堀出シ。贈ルタ陽ニ至リ帰ル　―略―

七日―略―大谷塚ニ而銀環又五ツ堀出ス

―略―

十六日曇　松浦（武四郎）へ土偶人ヲ贈ル男首附欠同左腕三同右腕三女首髷付一同左右腕二壺三同大一総テ目方二貫八百匁松山ヨリ川越船へ積ル七刀鋏鏃ハ道義持参之事

とある。武香がしばしば足を運び、遺物採取を行ったのが、三千塚古墳群のある大谷村（現東松山市）だった。遺物収集趣味は高じ、遺跡発掘への思いが次第に募っていった。

その夢は、米人動物学者エドワード・Ｓ・モースが日本の近代考古学の夜明けを告げる大森貝塚

根岸武香から松浦武四郎に贈与された遺物
（松浦武四郎『潑雲餘興』斎藤　忠『日本考古学資料集集成１』1989より作成）
塩野博著「埼玉の古墳」比企・秩父から

を発掘してから３か月後の明治10年11月、「穴居跡」発掘に結実する。穴居跡は横見郡黒岩村（現吉見町）の八丁湖に面した、丘陵斜面を掘った横穴だった。既に人の手が入っていたらしく、発掘した16の横穴からは期待ほどに遺物は発見されなかった。

横穴を踏査した内務省（現総務省）職員の柏木貨一郎は「腹に穴を穿ちたる瓦器１個を得た」[5]のみで、武香は「穴中ヨリ出品ハ別紙図之如陶器壱品獲候ノミニテ右陶器ハ横見神社ニ有之候」と埼玉県へ報告している。この唯一の瑳は明治13年、横見神社から帝室博物館へ献納された。

穴居か墓穴か　武香たちは発掘の記録を残さなかった。何を目的に黒岩横穴を発掘したのかわからない。穴居説を実証するためだったのか、遺物の収集だったのか、ハッキリしない。先の柏木など、断片的な報告からうかがい知れるだけだ。柏木は『黒岩村穴居の記』[5]で「当時の人民野草を以て此床を覆ひ以て安居となせしと推知せらる」と、「横穴穴居説」を主張したが、穴居説は次第に劣勢となり、昭和へ入って決着する。

反響を呼んだ『黒岩村穴居の記』　発掘例の少ない時代、柏木の踏査記への反響は大きかった。著名な人物が次々と穴居跡を訪ねる。武香はどんな感懐を抱いて博物局職員、わが国を代表する考古学者やヘンリー・シーボルト、エドワード・モースらを案内したのだろうか。

黒岩横穴群

先見性　百穴発掘の様子は、次回以降に譲るとして、今日、残されている写真は百穴の遠景、関係者や地元の子供たちなど、発掘終了間もない明治21年に撮影された。これらはアメリカで写真術を身につけた著名な写真師・小川一真（1860―1931、現行田市出身）に武香が撮らせたうえで、関係者へ配ったものだ。

まだ、写真の珍しい時代によくその記録的、資料的価値に気づいた、と感心せざるを得ない。さらに百穴保存のための卓越したアイデアとは……。

入場料、絵はがきの売り上げを維持・管理費にあてようと考えたのである。「縦覧切符」千枚、「優待切符」百枚、絵はがきと思われる「百穴写真」裏活印刷千五百枚を４月、小川に発注[6]。保存の夢が実現に近づいたのである。

そして「私（坪井）が（武香）氏を知り始めたのは明治18年」[1]という出会いに始まり、古代への情熱が二人の心を共振させ、武香を軸に、新たな展開を見せる。

注

(1)　東京人類学会雑誌第18巻第207号『根岸武香氏紀念号』、明治36年
(2)　埼玉県立文書館明2118帝国議会Ｃ7813
(3)　埼玉県立文書館林家文書7543
(4)　埼玉県立文書館林家文書7537「明治９年　千秋日誌」
(5)　『黒岩村穴居の記』東京日々新聞、明治11年４月
(6)　埼玉県立文書館6033根岸家文書1009

その2　坪井　正五郎　文久3．1．5―大正2．5．26（1863―1913）

坪井正五郎
（『人類学雑誌』第28巻1号から）

明治22年（1889）、わが国の「人類学のパイオニア」となる坪井正五郎は英国へ留学する。国をあげての近代化は、産業界にとどまらず、自然・人文科学などの世界でも例外ではなかった。留学の目的は、人類学の修得にあった。

14年、東京帝国大学（現東京大学、以下帝大）へ入学。人類学への意欲はつきなかったが、生物学を専攻。人類学を専攻するのは、人類学科のまだない19年、大学院へ進んでからだ。この時代の人類学は研究範囲が広く、考古学も含まれていた。

東京府下目黒村（現東京都目黒区）や埼玉県黒岩村（現吉見町）の黒岩横穴などの発掘に正五郎が確立しようとした人類学が垣間見える。

根岸武香との出会い　帝大在学時、根岸武香との交遊が芽生える。「氏を知り始めたのは明治18年」（東京人類学会雑誌第18巻207号）と述懐しているが、恐らく、論敵となる白井光太郎（しらいみつたろう）と「黒岩村及び北吉見村横穴」を実査したときを指すのだろう。

2年後、再訪の機会がめぐってくる。卒論のため20年8月4日、雨のちらつくなか、知人と横穴調査―測量を目的に武香を訪ねる。翌5日、武香を再び訪ね、6日にかけて黒岩を「穿鑿」後、北吉見村（現吉見町）の横穴―吉見百穴へ足をのばし、穿鑿。

百穴が大規模であることを感知する。7日は雨に見舞われ、発掘を断念。武香が持つ「古器物」を写した。8日、本格的な調査体制を組み、全容を明らかにしなければならないことを痛感し、帰京する（武香の日誌は5日来ル、7日黒岩北吉見へ行、とあり日付に齟齬がある。ここは坪井の記述によった）。

百穴発掘の序章　帝大要路の人に調査体制の整備と、それには多額の資金が必要になる旨を説き、現地見学を請うた。17日、帝大から郡區戸長地主等へ宛てた依頼書を携え、吉見へ取って返す。横穴の発掘現場には、地主の大澤藤助（とうすけ）に案内された帝大総長渡邉洪基（ひろもと）が立ち、つぶさに発掘を見学した。

18日、洪基と百穴を見た後、実力者である甲山（現熊谷市）の武香に引き合わせる。正五郎は洪基を紹介し、来意を告げる。

発掘調査に理解を示す武香は、地元の発掘に寄せる期待が熱いことを述べ、全面的な協力を約す。洪基は調査費用の拠出、発掘作業員の手配、宿舎の提供などを申し出る武香らの好意と、正五郎たちの「古代への情熱」に感じるものがあった。

洪基の経歴は明治初年、岩倉遣外使節団に加わった後、当時の政府最高機関―太政官に出仕、東京府知事などを経て19年3月、帝大初代総長に就任。同年6月、栃木県足利町（現足利市）でたまたま足利公園の出土品に接し、正五郎を発掘調査に差し向ける約束を足利織物講習所（現栃木県立足利工業高校）へしている。既にこのとき、埋蔵文化財の重要性を認識していたのである。

正五郎の良き理解者は、大学からの資金援助を決断する。

百穴の発掘　こうして半年に及ぶ、これまで経験したことのない大規模な発掘が下旬から始められる。

正五郎は科学的に遺跡・遺物へアプローチする。今日では発掘時、遺構に番号を付し、出土地点を記録するのは基本中の基本だが、正五郎は個々の横穴に番号をつけ、遺物がどの横穴から出土したか、判別できるようにした。横穴の形状、出土状態にも注意を払い、記録、分類していった。し

かし伝えられる遺物は、出土した横穴が明らかではない。

発掘は「敷迄」土をさらった。開口している横穴は、発掘するのがやさしかったが、出土する遺物は少なかった。未開口の横穴は土のくぼみ具合、足踏みしたときの音の響きで探し出したが、土は堅く、掘るのが難しかった。積もった土は入口を塞ぎ、内部は高さ5分の4ぐらいまで埋まっていた。

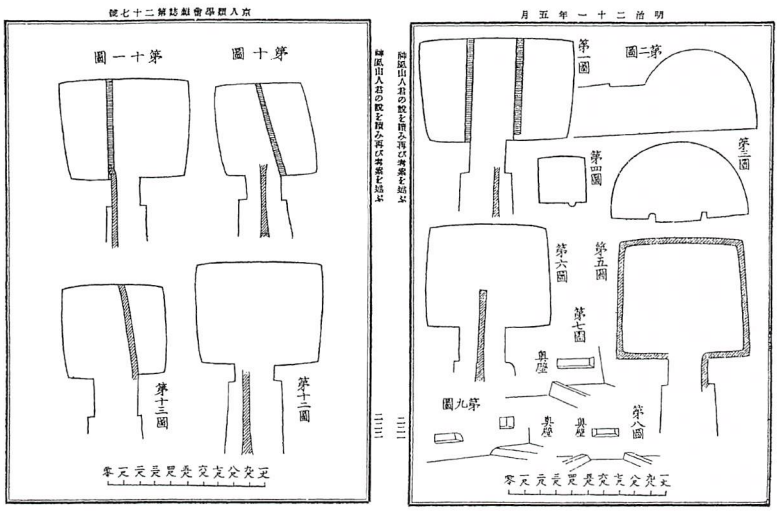


図19　吉見百穴実測図
（坪井正五郎『人類學會雑誌　第二十七號』1888より作成）
塩野博著「埼玉の古墳」比企・秩父から

横穴の構造は（図参照）室につながる「入り道」（羨道（せんどう））、入り道と室の境「中門」（玄門）、死者を納める「室」（玄室）に分け、壁の傾斜や敷の水平差などを細かく観察、床（棺をおく棺座）にも目を配った。完掘後は測量を行い、図面を作った。

出土品は後世の遺物が混入してはいたものの、入口の閉塞石や内部の石積の前で発見された。人骨、曲玉、管玉、直刀、小刀、鏃、金環、祝部土器〈須恵器〉、埴部土器〈埴輪、土師器〉などである。

人骨は完全なものはなかった。頸骨は床の上から、頭骨は崩れた土の上から散らばって発見された。祝部土器は室内にもあったが、たいていは入口の石戸や石積みの前から発掘された。

穴居説に固執　正五郎は発掘期間中の9月、東京人類学会の会合で横穴の性格について発表している（東京人類学会雑誌第2巻19号、第3巻22号）。「住居」「墳墓」「倉庫」の三つの説をあげ、

① 入口がせまいのは内外を区別し、戸で室を閉じるため
② 水はけをよくしている
③ 棚のあるのは住居と倉庫だけに用い、墳墓には不用
④ 横穴の構造が大同小異で、それぞれがほぼ同じ時期に作られたと見えるのは、墳墓というより、住居か倉庫という方が考えやすい
⑤ 室内に床のあるのは住居なら寝床、墳墓なら死体をおく所と思われるが、倉庫では解釈が難しい

と指摘したうえで、この五つの性質が残らず「合格」するのは住居ばかりで、倉庫は四つ、墳墓は二つしか合格しない。倉庫に床は不用であり、墳墓には「水はけ棚」は設けないので、一般に横穴は「穴居」とし、黒岩、北吉見の横穴は穴居と推量した。

最後に7項目をあげ

㈠ 黒岩、北吉見両村の横穴は住居の爲に穿たので有らう
㈡ 是等を作た者は金属の利器を所持して居たに違無い
㈢ 是等を作た人民は多分土蜘蛛と呼ばれた者で有らう
㈣ 是等の中には曲玉時代に葬穴に用ひられたものも有る
㈤ 葬穴に用ゐたのは我々の祖先で埴輪以後の事で有る
㈥ 北条執世の末頃にも横穴に人を葬た事が有るらしい
㈦ 葬穴に用ゐた横穴を後世に至て発掘した痕跡が有る

と締めくくった。

埴輪は横穴から出土しないのだが、この講演では66番の穴の前からほぼ完全な「筒」〈円筒埴輪〉3コを発掘した、とあり、「横穴を葬穴に用ゐた事は疑無なく」と横穴が墓であることを認めながら、何故か穴居説に固執した。

斜面にへばりついての作業は、足もとが悪く大変だったが、長い間埋もれていた事実を考えると、発掘は楽しかった。季節は移ろい、冬に入ると強風が彼らを容赦なく襲った。だが、白茶けた斜面にポッカリ口をあける横穴は、しだいに数を増し、発掘の終わる1月頃には200をこえていた。

人類学会の設立　正五郎らが後の弥生土器となる土器を発見した明治17年(1884)、同好の志と「人類学会」を創立する。彼らはこれ以前、遺跡探訪を繰り返し、遺物を採取しては、会合をもっていた。しだいに会場の手配や仲間への連絡などに不便を生ずるようになったのが、設立の契機だった。若い学徒たちが起こした波紋は、東京を核に弧状列島を南北に広げていった。

人類、民俗、古物遺跡などを研究対象に14人で発足した会は、正五郎が留学中の23年には174人にふえている。渡邉洪基、若き日の鳥居龍造（蔵）〈民族・考古学者〉、三宅米吉〈考古・教育学者〉、白鳥庫吉〈東洋史学創始者〉など、斯界では高名なメンバーにまじって根岸武香、大澤藤助長男、穹那（たかとも）の名が見える。

25年、帰朝すると帝大に人類学教室が創られ、第一代の講座担任者となった。以後、同教室は多くの人材を輩出、考古学界のけん引車となっていく。

吉見の百穴から世界の百穴へ　22年、正五郎が集めた色々の図をパリ万博へ出品、その中には吉見百穴の図2枚があった。百穴がパリから初めて世界に知らされたのである。さらに24年、ロンドンで開かれた第9回国際東洋学会では、「東京近郊における横穴200余の発見について」発表。百穴は世界の研究者に注目され、好資料を世界へ提供したのだった。

サンクトペテルブルグに死す　突然の死がやってくる。大正2年（1913）5月、帝國学士院（現日本学士院）を代表してサンクトペテルブルグ（ロシアのレニングラード）で開かれる第5回国際学士院連合大会へ出席するが、急な病を得て、客死した。「けふで会もお仕舞、めでたしめでたし」が最後の手紙となった。

多才にして多彩な江戸生まれの粋人は、道なかば、考古学の普及に努め、基礎を固めて逝った。

正五郎が標榜した考古学。それは道具（遺物）の背後に、必ず使った人がいることを念頭において論究した点にある。

参考文献

東京人類学会雑誌第18巻第207号『根岸武香氏紀念号』、明治36年
東京人類学会雑誌第2巻第19号『埼玉縣横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記、上篇』明治20年
東京人類学会雑誌第3巻第22号『埼玉縣横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記、下篇』明治20年
東京人類学会雑誌第18巻第207号『根岸武香氏紀念号』武蔵国横見郡北吉見村百穴之記
『坪井正五郎集』上巻1971、同下巻1972、築地書館

その3　大澤　藤助　　天保10．1．14—明治45．7．30（1839—1912）

数は230　百穴は7—8世紀にかけて営々と築かれた。その数は230以上。1,000人が葬られたと推定されている。死者が葬られるとふたが閉められ、外部としゃ断された。百穴は吉見や東松山の共同墓地だった。

やがて、長い年月が墓を土の中におおい隠し、人々の記憶から遠ざけていった。時たま墓はポッカリ口を開け、村人を驚かせた。里人は雨が降ったとき隠れる穴だとか、松山城の武器庫だとか言い伝えた。時には旅の僧やこじきが宿ることもあっただろう。江戸時代には再び存在が知られ、「百

穴」と呼ばれるようになった。

百穴は古物好きの人たちに憶説を生ませた。「住居だ」「いや、墓だ」と。こうして、明治20年（1887）８月東京帝大生（東京大学）らによって、６か月にわたり発掘が行われた。

発掘には地元の素封家も加わった。百穴の地主である甲山村（旧大里町、現熊谷市）の根岸武香と吉見村（現吉見町）の大澤藤助である。

明治21年、発掘後の風景

発掘成功の原動力　視察に訪れた渡辺洪基・東京帝大総長は大澤家に宿泊。藤助の案内で百穴や黒岩横穴を訪ね、未知の学問の可能性を感じ取った。地元と大学側の資金拠出により、それまでに例を見ない大発掘が始まった。

藤助は発掘を支える人夫を集め、進んで自宅を発掘隊に開放した。「吉見百穴」と染め抜いたハッピを着込んだ人夫たちは、藤助の長男、穹那（たかとも）指揮のもと、岩山に挑んだ。初め村人は「バチがあたるぞ」としりごみしたらしいが、藤助らの説得によってしだいに興味を示し、連日見物に押しかけた。出土品はベースキャンプの大澤家に運ばれ、黎明期の若い学徒たちは考古談義に花を咲かせた。

藤助らの物心両面の援助が功を奏し、白茶けた岩はだに黒い点が毎日のようにふえていった。こうして237の横穴が発見され、遠望すると「ハチの巣」のような姿が出現したのである。

発掘に要した人足賃は235円。このうち東大からの交付金85円88銭５厘は、数回に分けて正五郎から武香に渡された。７割弱が人足費、運搬費、畑などを踏み荒らした―若干の保証金に支出された。人夫賃総額の約６割を藤助や武香たちが負担したのだ。まさに、地元が発掘を支えたのである。

保存に奔走　発掘の行方が見えかけた11月中旬、正五郎、穹那、武香は発掘の善後策を協議した。遺跡保存の方法は、維持費は、誰が管理するのか、話しあった。穹那はその後も武香と面談して、保存策を煮つめていった。12月、土地を献納し、「看守人」を藤助と決め、同時に管理事務所などの建設が始められた。人類学会は地元の動静に反応し、同月、保存費用５円を寄付、学会の協力を得た保存工事は前進していった。

百穴の名前は広く知れわたり、遠くから訪れる者もあった。しかし、心ない来館者は横穴内にいたずら書きをしたりして、藤助たちを嘆かせた。そのため柵をめぐらすなど保護策を講じたが、「無頼の乱入者」はあとを絶たず、明治21年、武香と連名で保存請願書を宮内省（現宮内庁）に提出する。「古跡ヲ再ヒ埋没スルモ遺憾ナレハ更ニ此地ヲ献納シ　皇室ノ御料ト為シ無窮ニ傳エ度仰聞届御採用相成候……」。「皇室には関係がない」と却下されてしまった。土着民に由来するような遺跡は指定の対象にならなかったのである。

保存に要した費用は、外柵費65円、事務所費335円、雑費100円（旅費、写真代）だった。現在の貨幣価値では1,000万円くらいになろうか。

料金を取り保存　武香と藤助らは一計を案じた。保存のために入場料をとることを考えたのだ。大澤家は以後百穴の管理にあたった。大正12年(1923)、国の史跡に指定されても大澤家の墓守は続いた。町の手に管理が移ったいまもまだ縁は切れていない。料金所の跡に「百穴発掘の家」というみやげ物屋を営んでいる。

明治45年７月30日、「住居説」「墓地説」が対立するなか、藤助は亡くなった。因みに明治天皇が

崩御、大正と改元した日でもあった。

生花の師匠は大貫齋という号をこよなく愛し、墓碑銘にもこの名前を刻んだ。

年に30万　藤助たちが守りぬいた百穴は、東武東上線東松山駅の東方２㎞の地点にある。さらに東へ４㎞、吉見観音の北側、八丁湖を望む黒岩の地は、吉見の百穴に先べんをつける発掘が行われたところでもある。それは東京の大森貝塚が発掘され、わが国における考古学発祥の年となった明治10年のことであった。いま、閑散とした黒岩とは対照的に、吉見の百穴は古代史ブームにのって、年間30万（現在は６万）を超える人たちが押し寄せている。死者の魂も休まるひまがない昨今である。

参考文献

『吉見町史』上巻

金井塚良一著『吉見の百穴』

＊初出、朝日新聞さいたま特集（別刷り）「吉見の百穴」

＊今日では使われない語句がありますが、歴史性を考慮して、初出時のまま掲載しました。

その４　白井　光太郎　　文久３．６．２―昭和７．５．30（1863―1932）

福井藩士の子として、江戸藩邸に生まれる。広辞苑（第５版）には「植物学者。江戸の生まれ。本草学の権威。また、日本の植物病理学を開拓」とあるが、専門的な辞書を除くと大同小異「植物学者」としている。これは光太郎の一面しか伝えていない。植物学者に「考古学者」を加えるべきだ。

白井光太郎
（『白井光太郎著作集』から）

縄文土器の名づけ親　東京帝国大学で植物学を専攻するかたわら同級生の坪井正五郎と共に熱心に遺跡を訪ね歩く、考古学徒でもあった。明治17年（1884）「人類学会」の創設に参画した青年は、10代後半から20代半ばまで考古学と関わり、学史に残る業績を挙げた。

世界最古といわれる縄文土器。その命名者が実は光太郎であった。

それまで貝塚土器などと呼ばれていた土器を16年、原稿に初めて「縄紋土器」と書き記した。それから３年後の19年、縄文土器の名が公表される。人類学会報告第４号『中里村介墟の報告』の中で「縄紋土器」の語句を用いたのだった。その名が浸透し始めると、専門用語は固有名詞化、広く使われるようになった。

考古学上の足跡　これに先立つ16年７月19日、新編武蔵風土記稿から調べた足立郡貝塚村（上尾市）を踏査。

17年３月には正五郎らと新しい土器―後の弥生土器―を発見する。22歳の時だ。

同年７月から８月の夏休み、動物学助手の動物採集に正五郎と随行した旅は、遺物採集も兼ねていた。越後、越中、能登、加賀、越前、若狭、丹後、近江、山城、摂津を経て神戸から帰京する長旅だった。

遺跡、遺物の渉猟はさらに続く。

黒岩、吉見へ　明治十八年五月二日午後、坪井正五郎、神保小虎の二君とともに武州横見郡吉見村および黒岩村の百穴を探らんとて東京を出で、上野より汽車にて鴻の巣に至りここに一泊し、三日朝甲山村根岸武香氏の家を訪ひ古物を見せられん事を乞ふ。折節主人不在なりしが老大人出で合はれ、まづ座敷に通されたり。談話の際同家所蔵の埴輪土偶を示されん事を乞ひしに、右は東京の知人に貸し渡しあれば手許になし、かつ主人留守なれば古器は展覧に供し難し、ただ石鏃

の類のみ見すべしとて、所蔵の石器類数十函を出だし示さる。石鏃あり石剣あり石斧あり石小刀あり、その種類その員数ははなはだ多けれども一も出所を記せしものなく主人もこれを知らざるよしなり、されば、学問上にはあまり益なき品々なり。—略—元来根岸氏は甲山村の豪農にて好事の名高ければ、近辺の農民は石鏃土器の類を得るに随ひて携へ来て贈り物とする故、かく多数蒐集し得たるなりといふ。この日根岸氏より予等のために百穴案内者として篠崎仁平といふ人を付せられたれば、吉見黒岩両村横穴の巡見に大なる便宜を得たり。ここの横穴は穴居跡と称せらるるものにて、皆洞窟を岩壁中に横に掘りしものなり。—略—

吉見村の一窟の壁に、Siebold1878（明治11年）と刻みたる文字あり、外人の爲に先鞭せられたるを遺憾とす。この窟中より人骨の出でたるをシーボルト持ち帰れりと老大人の話なり、予は黒岩村土窟の坑口外において行基焼土器（須恵器）の破片を得たり。

この百穴を穴居跡といふ人あれども、予は一見してその墓穴なるを確信せり。第一洞穴の多数群集するは畿内の諸地に存する千塚の一種と見れば不思議なく、洞穴の構造各地の古墳に見る石槨（せきかく）と異らず、黒岩村の洞窟の如きは屹立（きつりつ）せる岩壁に掘り込み二丈（3.03m）近き高き場所に部屋の広さ三尺（91cm）にすぎざる小さきものあるは、穴居としては解する事能はざるを実見したればなり。（『明治十八年中埼玉県黒岩吉見両村における百穴を探るの記』、昭和３年７月「史蹟名勝天然記念物」第２集第７号）

横穴は墓穴だ　出土地の記載がなければ「学問上にはあまり益なき品々なり」と断じ、横穴は穴居ではなく「墓穴」だと直感した。横穴を畿内の古墳群などと同一とみれば「不思議なく」、石室の構造も古墳のそれと変わらない、部屋の広さが91cmでは居室として狭すぎ、住居と解することは不可能である、と実見した結果を述べた。

穴居説は明治10年ころには流布しており、墓穴説は少数派であった。20年、途中から吉見百穴の発掘に参加した光太郎は、このとき自説の正しさを確信したことであろう。

吉見百穴の発掘調査中、正五郎が『埼玉縣横見郡黒岩村及び北吉見村横穴探究記』を発表すると、神風山人の名で21年『北吉見村横穴ヲ以テ穴居遺跡ト爲スノ説ニ敵ス』（人類学雑誌25号）と題して、正五郎の穴居説に反論した。

論戦のはじまり　古事記を引用して「穴居は横穴にあらずして縦穴」と述べたうえで、同書には住居を横穴とみなす証拠はないとして、北吉見村横穴報告の穴居遺跡と認める非を論じた。

次に坪井の穴居説、５点をあげ、個々に批判を加えた。

1　横穴をつくるのには三つの目的がある

①　住居のため

②　墳墓のため

③　倉庫のため

水はけに注意し、棚を設けているのは、住居と倉庫のみに必要であり、墳墓には不用である。

評者（白井）はいう。水はけに意を用いるのは倉庫と住居とは限らず、墳墓にも必要である。死体が水や湿気に直に接しないよう葬るのは今も昔も変わらない。石棺や木棺に納めて葬るのはそれを嫌ったものであり、塚を築き、山を掘って好んで高燥の地を選んで葬るのは、この意味に他ならない。吉見村横穴は坑口がとても狭いので、棺を使わず、直に床上に安置したのだろうか。そうならば、水はけに意を用いるのはもっとも必要なことで、敢えて疑うべきものではない。

また、棚の有無はあまり関係はない。棚と名づけているが、棚らしいのはなく、棚のある穴はいたって少ない。

2　多くの横穴の構造が大同小異で、遠くない時期につくられたと思われるのは、墳墓というよ

り住居か倉庫のほうが考えやすい

評者。墳墓の一つ所に集在するのは普通のことで、その構造が一様なのはつくられた時が近いことを証明している。その数が多いのは、「居民」の多さを証明している。塚穴が近い間につくられた、と認めているが、墳墓説とは矛盾する。穴が穴居とするには証明不足である。

3　室内に床があるのが住居ならば寝床、墳墓ならば死体を置く所と思われるが、倉庫と見ると、解釈が難しい

評者。これを以て倉庫とするは附会の説であって、評価に値しない

4　武蔵国橘樹郡新作村（神奈川県川崎市）の「4階穴」や連結した穴がある事実は、横穴が穴居である、と推知される

評者。坪井が個々にあげた横穴は、未だ穴居という証拠がない。幾百列挙しても北吉見村横穴の穴居を証明するには足りず、前文のような結論を述べるこそ不思議である。

5　わが国においては古代土雲およびその他で穴居が行われていた

評者。口の狭い穴に人が住んだとは聞いたことがない。自ら4、5日穴の中で寝起きすれば、住居に適しているかどうか、わかるというものだろう。坪井の論は臆説であって、世を欺くだけである。反論を待ち、それに対する論文を発表する。

光太郎の反論は、手厳しく、痛烈であった。当然、正五郎も黙ってはいなかった。

土雲だとか、今では荒唐無稽な論争に思えるが、第一線の学者が繰り広げた論戦は、光太郎の墓穴説を契機に大正まで続いた。

終止符を打ったのは根岸武香の葬儀のおり、弔辞を代読した内務省嘱託の柴田常恵であった。大正14年（1925）のことである。

論争は不毛ではなかった。「コロボックル」の存在が否定される成果もあった。

光太郎は、論争の火蓋を切ったが、以降、論戦を静かに見守った。時折、人類学会創立時の思い出や序文を人類学雑誌などに寄せた。

植物学者・武田久吉は光太郎の懐古談として、「元来考古癖があって、それを専攻したいのは山々であったが、それではなかなか思うように衣食しがたいので、パンを獲るすべとして植物学を選ばれたのだということである」と。

参考文献

白井光太郎著作集　全6巻　科学書院

＊原文の（　）とルビ、傍点は筆者。原文は全て縦書き

＊本項はさきたま史跡の博物館ホームページに連載のものを、加筆して載せました。